

幹線道路につながる細い道の先には、たくさんの子どもたちが笑顔 で迎えてくれた村があった

まだ18歳のお母さん。村で出会った母 親の多くが10代後半から20代前半

お母さんの命 18歳 あなたは?」 何歳ですか?」

生や大学生ぐらいの年齢。れていた。彼女たちは、ま 小さな赤ちゃんが抱か まだ高校

さんも。 照れながらも、幸せそうな笑顔を んも、 次から次へと現れる。みんな少 ちこちから人が集まってくる。 日本人が来たと聞いて、 「写真撮って!」 「兄弟は何人?」 そしておなかの大きな妊婦 これでもかというぐらい 赤ちゃんを抱えたお母さ 村の

人や5人という答えが返ってく は子だくさんの

死亡率が高いレイテ州で同様のプ ロジェクトを始めることになった。 と、フィリピンの中でも妊産婦この成功を他の地域へと広げよ の石賀智子さん

が課題です」と話す。現在、5人 自宅で出産する女性もまだいるの 療施設へのア の日本人専門家が保健省の職員と 「この地域では経済的な問題や医 医療施設の整備や医療従 ネット株式会社) クセスの悪さから、

対象に研修を実施した。「豚肉を ルモックにあるBHSの助産師を

困難の新生児を蘇生させる方法を

出産に

に位置するタクロバンの近くで、

つの村に立ち寄った時のことだ

行機で約1時間。

レイテ島の北東

リピンの首都マニラ

から飛

落としてしまう妊産婦が多い。 緊急時に対応できないため、命をち会い、大量に出血した時などの ない昔ながらの産婆さんだけが立 る割合が高いこと。資格を持た その原因の一つが、

では70%、ビリラン州では90%に 成などに取り組んだ結果、 婦を支える保健ボランティア で母子保健サ 島北部のイフガオ州とビリラン島 まで改善された。 トだった施設分娩率はイフガオ州 した医療技術の研修や妊産 CAは06年、ルソン ・ビスの改善に乗り 助産師を 40 % 以 の育

子どもを抱えたお母さんたちが順 けることができ、 外にはいすが並べられ、 身近な医療施設だ。 いた。今日は感染症予 小さな

産師のノルマブ・バケロスさ と、てきぱきと動いているのが助 そう子どもたちに声を掛けなが 「すぐ終わるからね」 体重を測ったり注射をしたり 彼らの健康を守ってきた。 人々に寄り

[右] 「助産師向けの研修では、注射の練習で手が震えてしまった人も。実践的な内容にして技術向上につなげました」と話す水野専門家(右) [左] 医師、君護師、助産師が研修で傷口を縫い合

プロジェクトでは、

18の町とオ

わせる技術を練習。きちんと習得できているか確認す る石賀チーフリーダー(右奥)





地域の人々を支える最も身近な存在が

で一番小さな行政単位で、 すコンビスというバランガイに着 の規模だ。 人が暮ら

般的には約10のバランガイごとに 小さな小屋の前で車を降り 産婦の産前・産後健診などを受 つ、BHSが設置され それがバランガイヘルスステ ョン(BHS)だという。 人常駐している。 住民にとって最

タクロバンから車で40分ほど南 レイテ島の村で出会った母子。 生まれて8日目の赤ちゃんをお母 さんが愛おしそうに見つめていた

地域ぐるみで支える母子の命

設備の整った病院で出産するのが当たり前ではない国が、

日本が母子保健サービスの改善に取り組むのが

写真(9ページ左下、11ページ上を除く)=谷本美加(写真家)

世界にはまだたくさんある。

フィリピン東部のレイテ島だ。

フィリピン from **PHILIPPINES**

April 2014 **mundi** 08

お母さんと赤ちゃんの命を守るため、



%だった施設分娩率

の結果、レイテ州では05年には23持するためだ。こうした取り組みげた。保健サービスの、質、を維げた。保健サービスの、質、を維

知事、副知事、41の市町村長を一同に集めた会議を開催し、地方自治体が連携して母子保健サービスの向上に取り組んでいる

台風被害を乗り越えて過去最大の

現場も保健省も日本人専門家

婦が安心して出産できる環境が整 年には66%にまで改善した。

いつつある。

も、ビニールシートで雨露をしの助物資のテントで暮らしている人建物の屋根は吹き飛んだまま。接 直撃を受けたのだ。 スの改善に奔走していた矢先、 約5カ月たった今でも、 い超大型の台風「ハイエン」 大きな困難が襲いかかってき 一丸となって母子保健サー 13年11月 ハイエン」の 多くの 穾

HSは妊産婦の健康を守る最前 実践的な内容を心掛けました。B です」と、研修を担当した水野俊のレベルアップがまず第一歩なの線。住民の一番身近にいる助産師 は

ただ、助産師一人だけで全ての 受け持つ。

好産婦をケアするのは限界があ 育成だ。助産師が彼らに基礎的な 育成だ。助産師が彼らに基礎的な 母子の健康管理について研修を行 母子の健康管理について研修を行 多い場合は50から70世帯を 妊産婦がいれば産前か

コンビスBHSにワクチン接種に来た親子

もいる。そんな時に役立つのが、 医師が一人、 看護師と助

健所へ行ってみると、入口には診の搬送先になっているドゥラグ保 朝9時。昨日訪れたBHSから

出する仕組みを整えた。 「赤ちゃんの肌が黄色くなって 「出産までに4回、 います」

し、毎週、レポ

トを助産師に提

ら産後6週間まで定期的に訪問

かもしれないので、診察を受ける いたら肝臓や胆のうに問題がある

ペソ(約100円)が行政から支ペソ(約100円)が行政から支ィアたち。活動費として1カ月50 はない。それでもなぜ、活動を続 給されるが、決して大きな金額で ようお母さんに伝えています」 そうはきはきと答えるボランテ

きた。 地域の仲間だからこそ、役に立「村の人たちを助けたいからよ」

察を待つ人々が何人も並んで

BHSで手に負えない重症患者 科まで、全ての患者を限られた数 あちゃんもいる。 がした男性、腰が痛いというおばんを連れた女性もいれば、足をけ た。風邪をひいてしまった赤ち ここでは、

産前産後ケアウトで調師、助産師全員に研修を実施し、護師、助産師全員に研修を実施し、 術をたたき込んだ。

14年にわたりこの保健所で診察

こう答えてくれた。 けるのかと聞くと、満面の笑みで 健診に行く月で 健診を受け

ボランティアも手伝い、ポリオのワクチンを赤ち ゃんの口に垂らす

診察室が2つだけのコンビス BHSだが、母子を守るために

果たす役割は大きい



コンビスBHSのバケロス助産師。健診に来た 子どもを診察し、体重などを母子手帳に記録

母子を支える仕組みづくり地域全体で

るのは、 時にも対応できる。 だ。ここに迅速に運ぶことで緊急 産師が数人常駐する町の保健所 テムだ。BHSから患者を搬送す より大きな医療施設への紹介シス

の医療従事者で診なくてはならな

小児科から外科、

妊産婦の数も多いため、

水野

闘している。 使えなくなってしまった。それで は暴風で建物が壊れ、 受けた。その一つ、トロサ保健所BHSや保健所も甚大な被害を ッド、滅菌機器なども水に漬かり、ートル以上浸水した。分娩台やベ いでいる家もある。 保健所として機能しようと奮 町役場に間借りしたスペース 1階は1メ

今は、自分たちだけで分娩に対応

と言われたものですが、

できるようになってきました」と、

笑顔を見せる。

さらに、

郡病院や州病院のスタ

レイテ州保健局の職員など

研修

看護師や助産師が自信を持つよう は、「研修で一番変わったのは、 を続けるアラン・アルバレゾ医師

になったこと。

前は事あるごとに したら

来ていた。おなかの子は今7カ月メイレン・アベリアさんが健診にこの日も、一人の妊婦、20歳の ています。でも、定期的にここでだ。「初めての出産なので緊張し

で学んだことを生かせているか、 が各保健所やBHSを訪れ、

> 母親になるまで、 とはにかみながら話してくれた。 診てもらっているので安心です_ もう少しだ。

きるはずです」 だから私たちは先に進むことがで 保健を支える仕組みもあります。 残っています。 「建物や機材は壊れてしまいまし 保健省東ビサヤ地域局の クナ局長は、 研修で学んだ技術や知識は 地域ぐるみで母子 こう力強く語る。 ホセ・

ない。これまで積み上げてきた成 決してゼロからのやり直しでは



ドゥラグ保健所のアルバ レゾ医師は「4万人を対 象に診察していますが、 人手が足りないのが一 番の課題」と話した



チェックする

トロサ保健所に健診を受けに来た妊娠7カ月のアベリアさん。助産師が心拍数などを